

研究活動

山 脇 雅 夫

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又 は発表 の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数
(著書)						
(学術論文)						
1. ヘーゲル『精神の現象学』における概念的自己の生成と展開	単著	1990. 3	京都大学修士論文	ヘーゲルが哲学の原理とした「概念」の立場が『精神の現象学』においてどのように生成してくるかを論じた。ヘーゲルは彼のいう「精神」の構造を「我々である我、我である我々」という形で定式化する。ここには、対話において典型的に示される、他を介した自己知が表現されている。近代市民社会において実現された個人と個人との相互依存的システムが土台となり、それを思想的に把握することで「概念知」が生成することを論じた。		
2. 反省と判断——ヘーゲル『大論理学』についての一試論	単著	1992. 9	『哲学論叢』 19号 京都大学哲学論叢刊 行会編	ヘーゲルが『論理の学』『本質論』のなかで考察している「反省」が、同じく『論理の学』『概念論』における「判断」の中でも働いていることを手がかりに、反省を特徴づける否定概念を分析した。ヘーゲル論理学において「この花はバラである」といった判断は個別存在と普遍存在とが結合した事物の構造を示すものであり、「反省」はこの結合において働く否定的関係付けの論理に他ならないことを示した。		25-36頁
3. ヘーゲル論理学における科学的知識の成立——神の存在論的証明の一側面	単著	1994. 7	『アルケー』 2号 関西哲学会年報	ヘーゲルが『論理の学』『概念論』で、「神の存在論的証明」の論理構造を解明したとしている箇所を分析した。そこで「形式」という概念と「内容」という概念が重要な役割を演じることに注目し、『論理の学』でのそれらに対する定義をもとに、ここで問題になっていることが、学的知識にそなわる必然性からその実在性を導くものであることを解明した。それが自然学的知識の基礎付けとなっていることを明らかにした。		126-136頁
4. 仮象と反省——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために	単著	1995. 3	『近世哲学研究』 1号 京大・西洋近世哲学史懇話会編	『論理の学』『本質論』冒頭箇所を注釈した。反省が普遍と個別との間の運動を示すものであることを中心に、普遍の本質の不在を示すものである「仮象」もまた、まさにこの不在ということによって本質との関係を示すものであること、また、反省の運動から存在を導くヘーゲルの意図が、普遍と個別との関係が存在論的一次性を有するものであることを主張するものであることを指摘した。		68-89頁

5. 学の論理——ヘーゲル『論理の学』研究序説	単著	1995. 6	『密教文化』191号 密教研究会編	「存在論」、「本質論」、「概念論」という『論理の学』の体系構成がもつ学問論的意味を考察した。『論理の学』第一巻「存在論」は基本的に直接的存在を表現する思惟規定を叙述し、第二巻「本質論」は存在を解して認識される内的な本質を対象とするが、両者の統一としての「概念論」は、学的知の構造を、直接的データと普遍的記述の総合として示すものであることを解明した。	109-127頁
6. 存在と学——ヘーゲル『論理の学』研究序説	単著	1996. 3	京都大学博士論文	ヘーゲルが『論理の学』の中で示した独自の存在概念を第二巻「本質論」を中心に考察した。直接的存在は、生々流転を繰り返す捉えどころのないものであり、他方、現象への適用を欠いた普遍的記述は空理空論に留まる恐れがある。両者が統一的に把握されて初めて、実在性を持った学知となるのであり、そうした学知に捉えられるものこそが存在である。「本質論」は学知の生成の過程を叙述していることを解明した。	
7. 有限な事物の本性としての矛盾——ヘーゲル『論理の学』「反省規定論」注解	単著	1996. 8	『ヘーゲル論理学研究』2号 ヘーゲル〈論理学〉研究会編	『論理の学』第二巻「本質論」の「反省規定論」を注釈した。ヘーゲルは、「この花はバラである」といった判断が実在の構造を示すものであるとし、主語を述語に包摂する思惟の働きを反省と呼んだ。「同一性」、「区別」、「矛盾」といった反省規定は、そうした反省の働き方を示すものであり、判断の主語となる個別的存在者が、同一であり、他から区別され、矛盾するものとして反省されることを示すものであることを明らかにした。	33-58頁
8. ヘーゲルとヴェーバー——近代の運命をめぐって	単著	1997. 12	『理想』660号 理想社	ヘーゲルとヴェーバーが、ともに近代文化という問題と対峙していたことを明らかにした。ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と、ヘーゲルの『精神の現象学』を中心に、両者の近代文化に対する認識が多くの共通点を持つことを確認した。しかしヴェーバーが近代の分裂を運命として引き受けるのに対し、ヘーゲルは発話・聞き取りの運動の中に、分裂の中での共同の可能性を見ていたことを指摘した。	72-82頁
9. ヘーゲルにおける存在と無との同一性のテーゼ	単著	1998. 8	『密教と諸文化の交流』 永田文昌堂 著作者名は多数につき省略	『論理の学』第一巻「存在論」冒頭の存在と無の同一性のテーゼを分析した。『論理の学』冒頭の「存在」は第二巻「本質論」冒頭の「反省」の一局面を、「反省」は第三巻「概念論」の「判断」の一局面を叙述したものである。判断のコブラは主語と述語を区別しつつ関係付けており、否定と肯定とがともに含まれる。存在と無の同一性は、こうしたコブラの示す関係主義的存在性を表現していることを解明した。	185-200頁

10. 近代の存在論——ヘーゲルの現実性概念	単著	1998. 10	『哲学研究』566号 京都哲学会編	『論理の学』第二巻「本質論」の「現実性」という章で扱われた存在の構造を考察した。「現実性」の章は、その最後のカテゴリーである「相互作用」において、自立した実体同士の間相互承認的存在構造を描き出している。ここでは、近代の分裂文化の中において、分裂を単に絶対的同一に回収してしまうのではなく、分裂を分裂のまま生きることを基礎付ける存在論が構想されていることを主張した。	89-127頁
11. ヘーゲルの根拠論——知と存在との相即	単著	1999. 12	『近世哲学研究』6号 京大・西洋近世哲学史懇話会編	『論理の学』第二巻「本質論」の「根拠」の章の分析した。根拠づけるという知の働きは、根拠と根拠づけられるものとを区別・関係させることで事柄を把握するが、落体の法則のような普遍的な法則をを石の落下のような個々の事象に關係付けるためには、初期速度や石の高さといったさまざまな個別的条件があげられる必要があり、普遍的根拠の根拠付けの働きは、個別的条件に支えられていることを解明した。	28-48頁
12. 「促し」とはどういう行為か？——初期フィヒテの間主観性の理論	単著	2000. 12	『フィヒテ研究』8号 日本フィヒテ協会編	初期フィヒテの間主観性の理論の中核をなす概念である。「促し」を、『自然法論』ならびに『新方法による知識学』を中心に分析した。そこでフィヒテは、問いを受けた者が必然的に答えざるを得ないように（答えないこと自体が一つの答え）、促しを受けた者は必然的に自発的行為をせざるを得ないことを語る。促しを受けること自体が能動的なものであり、そこでは能動と受動が統一されていることを解明した。	98-115頁
13. 知の自己吟味——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について	単著	2001. 3	『近世哲学研究』7号 京大・西洋近世哲学史懇話会編	『精神の現象学』「緒論」に登場する「知」と「即自」の区別を考察した。「意識は或るものに関係すると同時に、この或るものを自分から区別する」という事態において、関係の側面が「知」と呼ばれ、区別の側面が「即自」と呼ばれる。この論文では、この事態が指しているのは、意識が自分の主観的な意識内容が客観的にも妥当していると主張するという事態であることを解明した。	71-88頁
14. 歩く人——遍路の哲学への序説	単著	2004. 3	『遍路学』 高野山 大学刊行	四国遍路について、哲学的考察を試みた。ハイデガーの技術論を手がかりに現代の技術文明の特質を考察し、その中で失われつつある根源的な自然や存在そのものとのつながりを、遍路がどのようにして回復するかを論じた。「我」意識が肥大化した現代人は、ひたすらに歩くという身体的行為によって我を無とし、そうすることで、世界を受け入れ、また世界に受け入れられる。そうした可能性を遍路に認めた。	263-267頁

15. 聖なるものの言語化—— ハーバーマスのデュルケーム論	単著	2005. 2	『高野山大学論叢』 4 0 卷	道徳の基礎が宗教から合意へと移行する とするハーバーマスの所説を、彼のデュ ルケーム論を中心に検討した。その結 果、ハーバーマスの言うようにデュル ケームにおいてある種のコミュニケー ション論的転回が生じていることは認め られるものの、デュルケームが宗教のう ちに見出した生の高揚に代わるものを ハーバーマスは提示できておらず、道徳 の基礎である価値はやはり聖性を帯びる のではないかという結論に到った。	25-47頁
16. 対話としての吟味—— 『精神の現象学』における 「外」の問題	単著	2006. 9	『哲学論叢』33号 京都大学哲学論叢刊 行会編	『精神の現象学』「緒論」に登場する 「意識との関係の外」が何を意味するの を考察した。まず研究史を概観し、知の 外にあって知を基礎付けるパラダイムを 指すという説、知によってテーマ化され たものの「地平」を成すという説などを 批判した。その上で、『現象学』の方法 である知の自己吟味の持つ対話的構造に 着目し、現象知が行う真理主張が「他 者」に向けられたものであり、「外」と はこの他者のことであると主張した。	1-13頁
17. 教育哲学の基礎としての フィヒテの像の理論 その1	単著	2008. 3	『高野山大学論叢』 4 3 卷	教育哲学としてフィヒテの知識学を捕ら えなおすための予備的考察をした。 チューリヒ講義の最後を締めくくる『人 間の尊厳』の中で、フィヒテは人類史的 課題に参画することによる人格形成を語 る。そこに教育哲学的モチーフを読み 取り、像の理論をその基礎をなすもの として解釈しようとした。本論では、その 前提として、知識学の原理の成立過程を 跡付けた。	31-46頁
18. 啓示宗教と絶対知—— 『精神の現象学』における時 間の問題	単著	2008. 12	『ヘーゲル哲学研 究』1 4 号 日本 ヘーゲル学会編	『精神の現象学』「絶対知」における 「記憶・内化」の意味を探るべく、絶対 知を直接に準備する段階である「啓示宗 教」を分析し、それに基づいて「絶対 知」の構造を考察した。啓示宗教は過ぎ 去った神を記憶において内化・現在化す る宗教である。同様に絶対知は『現象 学』の道程において過ぎ去った知の諸形 態を記憶において内化するところに成り 立つ。本論は「絶対知」は『現象学』の 全体をその内容としてもつ知であると主 張した。	113-124頁
19. デューイ教育論における 経験の意味	単著	2009. 2	『高野山大学論叢』 4 4 卷	デューイの相互作用概念に教育の抱える ジレンマを解消するヒントがあることを 明らかにした。教育には、社会の文化的 再生産という類的課題と、一人の人間の 成長を援助するという実存的課題があ る。この二つの課題は時に齟齬をきた す。だが、デューイは、相互作用を経験 の根本とすることで、個人が自分の人生 を全うすることと社会性が矛盾しないこ とを示した。そのことをデューイの教育 哲学的著作を中心に考察した。	1-12頁

20. ヘーゲルの教育観——ルソーとの比較を中心に	単著	2009. 2.	『高野山大学大学院紀要』11号	ヘーゲルもルソーも、特定の文化の形態や狭い社会の枠に限定されない普遍的主体へと自己を形成することを近代人の課題と見た。しかし、人間に内在する本源的な自然の導きにおいてそうした主体を形成しようとしたルソーと異なり、ヘーゲルは歴史の総体が普遍的自己に到る道である。歴史を通して歴史を超越した知を獲得することが、ヘーゲル見た近代人の自己形成である。	1-4頁
21. 演劇的知識論の基礎付け——『精神の現象学』「緒論」における知の構造	単著	2009. 12	『ヘーゲル哲学研究』15号 日本ヘーゲル学会編	『精神の現象学』の方法的特徴は、さまざまな知の立場がそれ自身の主張に沿った形で再構成されることにある。こうした方法は、近代認識論の根本前提である、主観・意識内容・客観の三項図式を打ち破るものである。「緒論」における知の規定は、この方法を基礎付けるものである。それは、虚偽の可能性を含んだものとしての自らの信念を客観的に主張するという、他者の観点を踏まえた知のあり方を叙述しているのだからである。	96-105頁
22. 人間の尊厳と苦——日本の尊厳の概念を求めて	単著	2010. 6	下西忠他編『仏教と差別』明石書店	人権の基礎を人間の尊厳に見定め、日本文化の伝統において、人間の尊厳がどのような感情の対象となるのかを考察した。シラーにおいて尊厳は崇高の感情との連関において捉えられ、人間を圧倒する自然力に対して意志が示す抵抗において崇高さ感じられるのに対し、日本では、苦のような抗い難いものを受け入れていくところに崇高さが感じられてきたことを、正岡子規や谷川俊太郎の作品を題材に考察した。	139-157頁
23. 他における絶対者——『精神の現象学』における実体=主体テーゼの考察	単著	2012. 11	『哲学論叢』39号京都大学『哲学論叢』刊行会編	ヘーゲルは『精神の現象学』において、「真なるものと実体としてでなく、主体としても把握する」ことを主張している。本稿では、このテーゼ前半の「実体としてでなく」がシェリング的な絶対者の直接把握の拒否を主張するものであり、「主体として把握する」ことは、反省的知に対する現れた相で絶対者を把握することを主張するものであることを解明した。	13-26頁
24. ヘーゲルにおける知と超越——ドイツ観念論の新しい地図のために	単著	2013. 6	『アルケー』21号 関西哲学会年報	従来ヘーゲル哲学は知を絶対化した哲学として捉えられ、そこには知に対する超越は存在しないとされてきた。しかしヘーゲルは哲学知を、「絶対的他在における純粋な自己認識」と特徴づけており、この「他における」という相にすでに知に対する超越が組み込まれている。その意味で、知の外という問題圏を認めた後期フィヒテ・後期シェリングとヘーゲルは比較可能である。	49-59頁
25. 他における絶対者の臨在——「本質論」から「概念論」へ	単著	2014. 12	『ヘーゲル哲学研究』20号 日本ヘーゲル学会編	ヘーゲル『大論理学』の「本質論」から「概念論」への移行の構造を理解するためには、まず、「概念論」がどのような知を叙述するものなのかを明らかにする必要がある。「概念論」は世界という他在に臨在する絶対者を叙述するものであり、「本質論」は世界と絶対者の二元論を克服することで、それを準備している。本稿では、この克服が反省の自己否定において生じていることを明らかにした。	128 - 140頁
(その他)					

1. L. ジープ『ドイツ観念論における実践哲学』(上妻精監訳)	1995. 11	第3論文担当	翻訳	
2. 最近の論理学研究論文批評—ホーゲマン、ラマイル2論文について	1996. 7	『ヘーゲル哲学研究』2 ヘーゲル研究会編	論文評	111-118頁
3. 書評：久保陽一著『ヘーゲル論理学の基底』(創文社)	2002. 8	『ヘーゲル論理学研究』8号 ヘーゲル<論理学>研究会編	書評	159-163頁
4. 文献紹介：Beiser, German Idealism	2011. 12	Prolegomena, 京都大学文学研究科西洋近世哲学史研究室編	文献紹介	30-37頁
5. 書評：山口祐弘『ドイツ観 〈口頭発表〉	2011. 12	『ヘーゲル哲学研究』17号	合評会記録	178-181頁
1. 絶対知の間主観的構造	1990. 12	現代哲学研究会 第57回研究会	『精神の現象学』における絶対知を「我々である我、我である我々」という構造から解釈した。	
2. ヘーゲル論理学と神の存在論的証明	1994. 10	関西哲学会 第46回研究大会	『大論理学』における「神の存在論的証明」を自然学的知識の成立という観点から解釈した。	
3. 促しとはどういう行為か?	1999. 11	日本フィヒテ協会 第15回大会	初期フィヒテの「促し」を共同行為として解明した。	
4. 『精神の現象学』における無知の構造	2005. 12	日本ヘーゲル学会 第2回研究大会	『精神の現象学』の緒論における知の構造を解釈した。	
5. 自己中心性と神秘主義	2006. 10	宗教倫理学会 第7回学術大会	トゥーゲントハットの所論をもとに、宗教体験の構造を脱自己中心性として解釈した。	
6. 『精神現象学』における対話の意味	2008. 6	日本ヘーゲル学会 第7回研究大会	クロス討論パネラー	
7. 山口祐弘著『ドイツ観念論の思索圏』合評会	2010. 1	日本ヘーゲル学会 第12回研究大会	合評会特定質問者	
8. 『大論理学』ワークショップ	2011. 6.	日本ヘーゲル学会 第13回研究大会	ワークショップパネラー	
9. 『精神現象学』ワークショップ	2012. 6	日本ヘーゲル学会 第15回研究大会	ワークショップコーディネーター	
10. ヘーゲルにおける知と超越	2012. 1	関西哲学会65回大会	ヘーゲル哲学において、知に対する超越が存在することを明らかにした。	
11. 他在における臨在——「現実」の存在構造	2013. 1	日本ヘーゲル学会 第18回研究大会	ヘーゲル『論理の学』における概念知の構造を剔抉し、それが「本質論」においてどのように準備されているのかを解明した。	

所属	文学部	職名	教授	氏名	山脇雅夫	大学院の授業担当の有無 (無)
教育活動						
教育上の主な業績		年月日	概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		2003年通年	宗教思想史授業において、前回授業のまとめを穴うめ式プリントを用いて学生にやらせた。			
		2011年後期	哲学方法論の授業において、マイケル・サンデル教授の講義ビデオを鑑賞しながら、それをモデルとした双方向的対話型授業を試みた。			
		2012年前期	教育原論において、生徒を変える授業というものを具体的に受講者にイメージしてもらうよう、教材として映画『豚がいた教室』を用いた。			
		2014年度	「日本語」の授業において、学生によるパワーポイントを用いた発表を取り入れた。			
		2015年	「人間学基礎ゼミ」において、大円院見学、高野紙紙漉き体験、など実地体験を授業に組み入れた。また、			
2. 作成した教科書、 教材、参考書		2003年通年	同上のための小プリント			
		2004年3月	『遍路学』4章の3担当			
		2006年3月	「日本語」テキスト作成			
		2007年3月	同上改定			
		2008年3月	同上改定			
		2009年3月	同上改定			
		2010年3月 2012年3月 2012年6月	同上改訂 日本語授業内で使用する「般若心経」現代語訳プリントの作成			
3. 教育方法・教育実践 に関する発表、講演等		2009年7月	『高野山教報』7月号授業内容レポート			
		2010年1月	『高野山教報』1月号「師を持つことの意味」(乾教授インタビュー)			
		2010年7月	『高野山教報』7月号授業内容レポート			

4. その他教育活動上 特記すべき事項		特になし。
------------------------	--	-------